

テに カルの 余白

東日本大震災から1年を経た
今も、国際医療NGO「AMDA
A（アマダ）」本部・岡山市
は、被災地の岩手県などで医
療を中心とした支援活動を続け
ている。活動を貫くのは、困っ
た時はお互い様という「相互扶
助」の精神だという。

高齢者ら「医療難民」に

△米ウイスコンシン医科大教
授の高橋徳さん(61)は、あの日
から1年がたった今月11日午後
2時46分、岩手県大槌町の海岸

AMDA(アマダ) 国

被災地支援「お互い様」



被災者の男性に鍼灸治療を施す高橋さん(昨年7月、岩手県大槌町の避難所で) △高橋さん提供

に立ち、黙とうをささげた。米
国から同町を訪れるのは4度目
になる▽

震災後の昨年3月20日から約
3週間派遣されました。避難所
だった同町内の高校の教室を間
借りした仮設診療所で診察にあ
たりました。自宅や地域の集会
所などでは、避難生活を送る被
災者の往診もしました。

△「医療難民」とも言える被
災者を何人も診た▽

高齢の男性は右足がしびれて
動けません。診てみると、血管
が詰まって血流に障害を起し
ている恐れのある状態で、すぐ
に病院へ搬送しました。普段な
らもっと早く医者へ行くはずで

す。周りで多くの命が失われる
なか、しびれや痛みを訴えるの
はぜいたくに感じ、我慢された
のでしよう。

震災直後の町内ではほとんど
の医療機関が津波で機能不全に
なり、慢性疾患などを抱えた高
齢者らが、医療から孤立した状
態に置かれていました。それを
支えるのが私たち、AMDAの
役割でした。

地元のニーズ聞く

△町内で県の仮設診療所など
の診察が始まった昨年4月以
降、AMDAは活動の軸足を復
興支援に移した▽

地元の医療機関が再開した後
も、私たちが診療を続けると、患
者を奪い合い、復興の妨げにな
りかねません。地域医療はまず
地元の主治医らが担うべきで、
被災地の病院で医師らが休暇を
取れるよう、交代要員を派遣し、
再建された病棟に機材を提供し
ています。私たちは側面から支
援したいと思います。

△被災地のニーズを正確に把
握することで、継続的な支援が
できる▽

仮設診療所で私は、それまで
に経験のあった鍼灸治療を始
めました。高齢化の進んだ地域
なので、腰や関節に痛みを抱え
る患者にニーズがあったからで
す。

津波で施設施設を流された鍼
灸師を、AMDAの有給スタッ
フとして雇用し、巡回治療を始
めました。

昨年7月に再訪した際、現地

の医師らから聞き取り調査をし
たところ、患者から鍼灸治療を
求める声が強くと聞き、12月、同
町で健康サポートセンターを開
きました。鍼灸治療に加え、交
流スペースは、地元の方々の料
理や体操の教室などのイベント
に使われています。これも地元
のニーズがあったからです。

△「相互扶助」を提唱するA
MDA代表の菅波茂さん(65)
は、復興へ向け、エールを送る▽
東北の皆さんへ、私はこう訴
えています。今は助けられる立
場かもしれないませんが、近い将来、
東海・東南海・南海地震などの
大災害に襲われ、多くの被災者
が出る可能性があります。その
時には、支援をする側になっ
て、ぜひ助けてください。そうな
っていたらためにも、一日も早
く復興してください。そのため
の支援は惜しみません。

(聞き手 阿部健)